

日本語観を塗りかえる必読の文学史

山本貴光（文筆家・ゲーム作家・東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授）

古くから日本語は、異言語に育まれてきた。もしそう見えないとしたら、それはひとえに翻訳のおかげだ。いまでこそ、スマートフォン、インヴェーション、コンプライアンスと、音だけカタカナに写して済ませることも多く、見た目で外来語と分かる。だが例えば、時間、空間、社会、科学、芸術、哲学、理性、恋愛はどうか。あるいは「目から鱗が落ちる」といった慣用語も。語彙や表現に加えて、日本語の文法や文体にも異言語から翻訳されたものが多々含まれている。古くは漢籍や仏典、江戸には蘭学、明治以降はもっぱら西洋の文物を翻訳して日本の言語や文化は変化してきた。その範囲は、法律や政治や教育の制度、学問や技術、仕事や生活のあり方に至るまで多方面に及ぶ。

概要はそうだがとして、では実のところはどうだったのか。こうなると話はまるで別である。近代に限ってみても、どのような翻訳がなされたのかを知るには、一冊一冊の本を探し集め読み、その背景を調査検討する必要がある。お分かりのようにこれは誰にでもできることではない。本書の姉妹編『幕末明治翻訳書事典』は、文学の方面について翻訳書を整理・解説した、いわば総合データベースである。また、それぞれの本が珠だとなれば、糸でつないでこそ、その意味や価値もよりよく見えるというもの。本書『幕末明治翻訳文学史』は、翻訳文学を文字通り博覧した著者が、そのような知見の積み重ねを通じてしか見えない歴史を描き出し、惜しげもなく共有してくれるのだ。なんとという贈り物だろう。

本書によって私たちは、現代の日本語につながる見失われた轍を、ほとんど初めてとってよい細やかさで辿ることができるようになる。異言語を前にして彫心鑿骨の思索と工夫を重ね、新たな日本語を生み出した翻訳者たちの足跡を辿ることで、読者は、見慣れた日本語を異言語のように見直すことになるだろう。そんな稀有な体験をもたらす『幕末明治翻訳文学史』の出現を心からよろこびたい。



坪内逍遙訳『贗貨つかひ』
(A・K・グリーン／明治21年)



藤田茂吉訳『セキスピーヤ叢書
仏国某州ノ領主麻吉侯ノ情話』
(ラム姉弟／明治16年)



井上勲訳『開巻驚奇 龍動鬼談』
(E・ブルフ・リットン／明治13年)

本書の特徴

- ◆『幕末明治翻訳書事典 文学・伝記・外国語リーダー篇』に掲載した書籍を中心に、翻訳書が果たした役割を、社会的・政治的文脈も視野に入れつつ、魅力的なテーマ設定のもとに解説した、「目で見える」文学史。
- ◆翻訳文学書の調査・収集とそれらを用いた研究に四十年以上にわたって従事してきた著者の集大成。
- ◆『幕末明治翻訳書事典』の収録書に、錦絵や彩色版画など書籍以外の一次資料も加え、計1000点余の図版をオールカラーで掲載した。また図表なども駆使して視覚的に把握しやすいつくりとした。
- ◆索引は、人名、書名・作品名、事項索引を完備して、読者の便に供した。



為永春水作
『絵入教訓ちかみち』
(イソップ童話
／天保15年(1844))

関直彦訳
『開巻驚奇 西洋復讐奇談』
(A・デュマ・ペール
／明治20年)

宇田川文海訳
『汝所好』
(シェイクスピア
／明治21年
〈写真は明治23年
ポール表紙版〉)

『幕末明治翻訳文学史』

全2巻／B5変型判(250×190ミリ)
／上製(かがりPUR製本)・カバー装・輸送函入り／オールカラー

第一巻 433頁
定価：本体26,000円＋税
978-4-336-06602-2
2022年10月刊行

第二巻
978-4-336-06603-9
2024年9月刊行予定

続刊

本書をおすすめします

文学部文学科 | 日本文学、西洋文学、比較文学、児童文学、日本語史などの研究者
文学部哲学科 | 明治精神史などの研究者
文学部歴史学科 | 近代史などの研究者
教育学部 | 教育史などの研究者
政治・経済学部 | 日本近代政治史などの研究者
保育学部 | 児童文化などの研究者
美術系大学・学部 | 明治期版画、装丁史などの研究者
都道府県立図書館、市町村立図書館
文学館、美術館、博物館
江戸・明治期書籍の愛好家、古書店 ほか



第一巻 書影

幕末明治翻訳文学史

川戸道昭 [著]

十返舎一九の手になる「ガリヴァー旅行記」の翻案、河鍋暁斎の描いたイソップ寓話の挿絵・錦絵、自由民権運動を煽動した革命小説、現代の「で・ある」文体を準備した外国語リーダー、翻訳文学界を席卷した黒岩涙香の探偵小説、森田思軒のフランス人道主義の紹介、山田美妙や二葉亭四迷らによる新たな日本語文章創出の試み、若松賤子の「小公子」の口語訳、多くの人が愛誦した森鷗外の「即興詩人」や上田敏の『海潮音』、新劇運動の先駆をなした坪内逍遙の「ハムレット」、島村抱月が演出し松井須磨子が演じた「人形の家」……。

海外文化の急激な流入に対峙した幕末明治の日本で決定的な役割を果たした文学や伝記の翻訳について、社会的、政治的背景をも視野にいれながら、バラエティ豊かなテーマから詳述する、オールカラーの「目で見る」文学史、ついに刊行開始！

全二巻
オールカラー

国書刊行会

二〇二二年十月刊行開始

『幕末明治翻訳文学史』を推す

柴田元幸（翻訳家・米文学者・東京大学名誉教授）

今日翻訳に携わる者から見て大変羨ましいことに、幕末・明治において文学の翻訳、もしくは翻訳文学、は現代よりずっとエキサイティングな営みであった。紹介・翻訳すべき西洋文学が膨大にあったというだけではない。翻訳しようにも、たとえば英語なら「動詞からしてどう訳すのか、最初から定まっていたはいなかった。現在我々は、若松賤子訳『小公子』の「セドリックには誰も云ふて聞せる人が有ませんかつたか」という言い方を珍奇な例として笑うが、「～ませんでした」もひとつの可能性として通るような流動性・可塑性が明治の日本語にはあったのである。翻訳者は外国語を日本語に「訳す」と同時に、日本語を「作る」役割も担っていたのであり、その限りにおいて「翻訳家」は「作家」でもあった。

その証拠に、本書『幕末明治翻訳文学史』第一巻冒頭で紹介されているとおり、明治二十四年に発表された「現今小説名家一覽表」という作家番付を見ると、一位は森鷗外、二位は幸田露伴、三位は森田思軒となっている。露伴はともかく、森田思軒と言えは当時「翻訳王」と謳われた人物であるし、鷗外にしても、著者川戸氏によれば当時は「むしろ翻訳によって名の知られた人物」であった。

『幕末明治翻訳文学史』は、そうしたエキサイティングな「翻訳の時代」の現場に読者を連れていくてくれる。生々しい資料を、テキスト・図版共にたっぷり見せてくれて、かつ読者が迷子になってしまわぬよう、必要にして十分のガイドをしてくれる。そのなかで定説はたびたび覆され、新たな説が説得力をもって提示される。たとえば『ガリヴァー旅行記』のいち早い翻案と言えは平賀源内の『風流志道軒伝』がよく挙げられるが、中身を仔細に比較してみると、十返舎一九の『新製小人嶋廻』の方がはるかに「ガリバー」に近いことが、ふんだんな資料によって証明される。あるいは、井上哲次郎らが『新体詩抄』を著して詩の文体の新しい可能性を拓いたことを知る人は多いが、本書はその一歩向こうまで話を進め、では井上は大学でどのような教師にどのような授業を受けた結果そういう新しい仕事ができただのかを論じ、その教師の仕事の意義まで仔細に分析する——と、他書より一歩も二歩も先へ・奥へ行く書物である。今後、この書を読まずして近現代日本の翻訳は語れない。



十返舎一九『新製小人嶋廻』前編 表紙
文政13年(1830)



『新製小人嶋廻』後編 表紙



キャッセル社版『ガリヴァー旅行記』第2編
第4章挿絵“The Queen and her maids would
come and watch me in my boat”

